

閉じる研究と開く研究の接点を目指して ～ 筑波人文情報学研究会の挑戦 ～

和氣愛仁^{†1} 宇陀則彦^{†2} 永崎研宣^{†3} 松村敦^{†2}

筑波人文情報学研究会は、筑波大学人文社会系及び図書館情報メディア系の教員が中心となって立ち上げた研究グループである。資料の在り方に対して両極端の姿勢を持つ、人文学研究者と図書館情報学研究者のコラボレーションによって、人文情報学へ如何にアプローチしていくかを、本研究会のこれまでの活動報告を交えて議論する。

Toward A Hub of Closed Research and Opened Research - Challenge of the Tsukuba Research Group for the Digital Humanities -

Toshihito WAKI^{†1} Norihiko UDA^{†2}
Kiyonori NAGASAKI^{†3} Atsushi MATSUMURA^{†2}

The Tsukuba Research Group for the Digital Humanities is a research group that was started by members of the Faculty of Humanities and Social Sciences and the Faculty of Library, Information and Media Science. This paper will discuss approaches to the digital humanities through the collaboration of scholars in the humanities and in library and information science, who have views from opposite ends of the spectrum regarding data and what it should be. The discussion will include a report of the activities of this research group to date.

1. はじめに

近年、人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）が急速な発展をとげ、研究コミュニティが世界中で拡大している。欧州では Association for Literary and Linguistic Computing (ALLC)、米国では Association for Computers and the Humanities (ACH)、カナダでは Society for Digital Humanities/Société pour l'étude des médias interactifs (SDH/SEMI) という形で分立していた学会が今世紀になって連合体 Alliance of Digital Humanities Organizations (ADHO) を形成し、デジタル・ヒューマニティーズの研究者が国際的に活動するための基盤が整った。日本でも 2012 年に日本デジタル・ヒューマニティーズ学会が設立され、ADHO に加盟した。その他、立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」¹⁾ や東京大学大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」²⁾ など組織としてこれに対応しようとする動きがみられる。このような動きを受け、筑波大学でも 2012 年度に人文社会系と図書館情報メディア系の教員が筑波人文情報学研究会^{a)} を発足させた。筑波大学にはリサーチグループ登録制度があり、研究組織をまたがった横断的な研究組織作りを推奨している。本稿では筑波人文情報学研究会の設立主旨と活動内容について報告する。

^{†1} 筑波大学人文社会系

Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

^{†2} 筑波大学図書館情報メディア系

Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

^{†3} 人文学情報学研究所・東京大学大学院情報学環

International Institute for Digital Humanities / Interfaculty Initiative in Information Studies, University of Tokyo

a http://www.jinsha.tsukuba.ac.jp/research_group/tsdh

2. 閉じる研究と開く研究の接点

2.1 学際研究

アレン・レプコ(Allen F. Repko)は、米国科学アカデミーなど、過去の定義を踏まえ、「学際研究」を以下のように定義した³⁾。

「学際研究とは、疑問に答え、課題を解決し、単一の専門分野で適切に扱うには広範すぎるもしくは複雑すぎるテーマを扱うプロセスである。より包括的な理解の構築のために知見を統合するという目標を持ち、学際研究は専門分野を利用する」

レプコは学際性は多専門性とは異なると述べ、フルーツのボウルとスムージーという比喩で説明している。多専門研究とは色々なフルーツがはいったボウルのようなものであり、隣接しているものの、混じり合っていない。学際研究はスムージーのようなもので、うまくブレンドされ、新しい魅力的な味がする。

この定義に従えば、人文情報学は、人文学でもなく、図書館情報学でもない、より包括的な理解の構築のために知見を統合するという目標を持つことになる。では、人文情報学の包括的理解とは何であろうか。それはおそらく「資源共有に基づいて文化の多様性理解を促進し、人文学資料の新しい意味や価値を引き出すこと」であろう。

デジタル化とネットワークが人文学にもたらしたものは資源共有である。資源共有によって、研究者コミュニティが形成され、異なる価値観を持った研究者との出会いが起こる。そこでの学術的衝突を通じて多様性理解が促進される。結果としてこれまで気づけなかった視点にお互いが

気づき、資料への新しいアプローチが始まった。

一方、デジタル化とネットワークが図書館情報学にもたらしたものはサービスの再構築である。資源共有は元々図書館サービスの中にあつたものであるが、できることは限られていた。しかし、デジタル化とネットワークによって、他の資料への到達可能性が飛躍的にあがり、新しい情報アクセス技術が多く開発され、利用者との距離が縮まった。その結果、資料との向き合い方も変わりつつある。2章では人文学の視点と図書館情報学の視点を、閉じる研究、開く研究という点から論じる。

2.2 人文学の視点

人文学の視点そのものをここで語るにはあまりに幅が広すぎるが、どちらかという閉じていると見なされがちな人文学において、どのような観点から閉じてしまう可能性があるかということについて検討してみたい。

少し前まで、あるいは現在も、典型的な人文学の視点から見た人文情報学は、取り組むのが難しそうであるにも関わらず価値がわかりにくいものであつた。確かに時代はデジタルメディア全盛となり、パソコンや携帯、スマートフォン等が普及したことで日常的にもデジタルメディアを利用する機会が増え、Webを利用したインタラクティブなサービスを利用することも稀ではなくなっている。パソコンを利用せずに原稿を書く研究者の方が珍しいという状況でもある。しかしながら、研究活動そのものはデジタルメディア上でなくとも遂行可能であり、敢えて人文情報学という位置づけで取り組むことのメリットは必ずしも十分には見えていない。実際の所、3万人いるとされる人文系研究者のうち、人文情報学に取り組んでいるとみなしうる研究者は数百人に過ぎない。

そもそも人文情報学に取り組むためのきっかけが、わが国では十分とは言えない。米国では全米人文科学基金^{b)}が、欧州でも欧州科学財団やドイツ研究振興協会をはじめ、様々な研究助成団体が人文情報学をターゲットとした研究助成を始めているなど、手厚い支援体制が構築されつつあり、様々な研究会やセミナーも広くあちこちで開催されているが、わが国ではまだこれからである。

さらに評価の問題がある。人文学の専門分野にとっては、人文情報学的な研究は評価がしづらい。分析的な研究はともかく、アーカイブ的な研究に関しては研究成果として認知すべきではないという考え方も根強く、精力を注ぎ込んだとしてもその対価が見えにくい状態では取り組むのも容易ではない。

アーカイブ的な研究に関しては、作成されたデータベース等の成果が特定の研究者、あるいは研究者グループの解釈を反映したものとみなし得るために利用を避けるという立場もあり、結果としてデータベースを作ってもあまり

利用されない場合がある。

また、人文情報学においてしばしば要請される「モデル」を作るという手法自体が人文学のある種の営みにはそぐわないという見方もある。このことは、人文学が人文情報学に対して閉じてしまう理由のなかでは根本的なものであると言える。

このように考えていくと、人文学は開いていく必要があるのかという基本的な問題を議論しなければならないだろう。開いていくことで社会からの現代的要請にこたえていくという姿勢は重要だが閉じていくことで議論を深めていくという方向性も重要である。多くの研究者がいるとは言え、専門的な深い議論をできるレベルにまで個別分野に絞った場合、人数が多いと言える分野は数少なく、さらに昨今の人文系研究者ポストの減少は研究分野としての継続にすら赤信号を灯しつつある。そうした状況の解決策として欧米では人文情報学が広く展開されつつあるという面があり、わが国でもそのことは大いに参考にしたいだろう。

2.3 図書館情報学の視点

人文学と図書館情報学は、文献または資料を対象にしている点で共通しているため、一般的にはかなり近い領域だと認識されている。少なくとも物理学や化学よりは近いと思われるであろう。しかし、人文学の研究がひとつの文献(ある領域の資料群という意味)に深く関わるのに対して、図書館情報学の研究は文献世界に広く関わっていくという点が異なる。すなわち、人文学は資料を要素として捉え、図書館情報学は集合として捉えている。人文学の研究者にとって最も大事なものは自身が扱っている資料であつて、他の資料にはそれほど関心はない。一方、図書館情報学の研究者にとって最も大事なものは資料全体の性質や状態であつて、個別の資料の内容には踏み込まない。

図書館にとって、人文学の資料はあくまで一部であり、様々な分野の資料を収集することに重点がおかれる。多様性の確保というのが図書館に与えられた重要な役割であり、ひとつの価値観や考えにとらわれてはいけいとされる。必然的に、図書館情報学の研究は資料全体をどう組織化すればよいのかといったことや、資料全体から適切な資料を検索するにはどうすればよいのかといったこと、あるいは図書館という組織をどう経営すれば資料全体をよい状態に保持できるのかといった問題に向かう。これは多分に実学指向であり、アカデミックな観点からみると、図書館情報学は学問として成立しているのかという問いが常につきまとう。図書館情報学とは何をする学問なのかという質問は日常茶飯事である。

このように学問的アイデンティティが確立していない図書館情報学が唯一拠り所とするのは学際性である。情報学はもちろんのこと、法学、経営学、経済学、社会学、教育学、心理学、言語学と関連させて研究領域を展開させてきた。しかしながら、皮肉なことに学際性を強調すればす

^{b)} 全米人文科学基金には、人文情報学助成を専門に担当する組織 Office of Digital Humanities がある。 <http://www.neh.gov/divisions/odh>

るほど、図書館情報学固有のアイデンティティは希薄になる。その研究は社会学、この研究は教育学といった具合である。様々な学問と関連させて研究できる意味では開いていると言えるが、図書館という枠組みからなかなか出られないという意味では閉じている。

人文学との接点もまた、数ある学際性のひとつである。しかしながら、デジタル化とネットワークによってもたらされた資源共有の流れは、人文学研究に変化を与えたように、図書館情報学研究にとっても資料との距離や向き合い方に変化を与えたという点で人文情報学の意義は大きい。人文情報学に取り組むことで、要素としての資料や集合した資料とは異なる、「べき集合」としての扱いが見えてくるかもしれない。

さて、図書館情報学のアイデンティティの問題については、2007年度の学群再編の際、学類名を変更するとともに、知識情報学への展開を図り「記録による知識共有現象の解明」を目的として掲げた。図書館情報学が「図書館に関わる諸現象、具体的には、制度、運営、書誌コントロール、サービス、施設に加えて、情報メディアの性質、それらの生産から蓄積、検索、利用までの過程を対象とする学問」であったのに対して、知識情報学は「知識は人間存在の本質的側面であり、社会のあらゆる活動の基盤としての「記録による知識共有」に関わる、人間の行為と制度と技術に関する学問」であると規定した⁴⁾。つまり、図書館を中心とする捉え方から、図書館は知識共有基盤のひとつであるという捉え方に変わったということである。人文情報学との関わりにおいても資料管理という捉え方から知識共有の在り方という捉え方に変わるであろう。

2.4 人文情報学の視点

「人文学の視点」の節で触れた評価の問題は人文情報学自身の問題として引き受けざるを得ない。人文情報学における研究成果は、人文学の成果として評価が難しいだけでなく、情報工学的な研究成果としての評価も難しい。したがって、人文情報学における成果として評価することが一つの選択肢となる。欧米の人文情報学では1986年にオックスフォード大学出版局から発刊された『Literary and Linguistic Computing』誌^{c)}をはじめとして様々な評価のための枠組みを作っており、近年は査読付オンラインジャーナルや若手向けの賞も用意されている。学会によっては参加旅費や参加費を提供するというような副賞を設けているところもある。CH研究会においても、従来の山下記念研究賞にとどまらず、じんもんこんシンポジウム開始とともに査読を導入し、近年では奨励賞やじんもんこんシンポジウムにおけるポスター賞など、様々な形で評価の仕掛けが用意されつつある。評価の軸は、人文学と情報工学のいずれかの分野でどの程度評価し得るか、そしてもう片方の分

野にも適切な配慮がなされているかということが基本となる。さらに、欧米では特に「方法論の共有地」^{d)}が提唱されており、これにどの程度貢献し得たかということも一つの軸になっているようである。

ところで、本稿のテーマの一つである図書館情報学との接点については、わが国ではまだまだ十分とは言えないが、特に米国では、ヴァージニア大学^{e)}、イリノイ大学、インディアナ大学、ミシガン大学といった大学の図書館情報学研究科や図書館等で人文情報学が発展してきたという経緯があり、むしろ図書館情報学が一つの基盤となって人文情報学が展開されているという側面がある。大学図書館の生き残り策の一つとして人文情報学が位置づけられていると言っても良いだろう。そのようなことから、米国の人文情報学では、学術情報流通のデジタル化と、新しい学術情報のエコシステムの構築という側面からのアプローチも強力に推進されている。筑波人文情報学研究会における図書館情報学と人文学との連携は、わが国においてそうした戦略が可能であるかどうかの試金石ともなり得るだろう。

2.5 筑波人文情報学研究会の研究領域

ここまでの議論をまとめると、以下のようになる。

1. 人文学から見た人文情報学は価値が分かりにくい
2. 特にアーカイブの研究は評価されない傾向にある
3. 人文学は開く議論だけでなく、閉じる議論も必要である
4. 人文学はひとつの資料に深く関わるが、図書館情報学は資料全体に広く関わる
5. 図書館情報学は学問的アイデンティティが常に問われる
6. そこで、図書館情報学から知識情報学への展開を図った
7. 記録による知識共有現象解明が知識情報学の目的であり、アイデンティティである
8. 人文学にとっても図書館情報学にとっても、人文情報学を研究することで新しい道が開ける可能性がある
9. 本研究会は人文学と図書館情報学連携の試金石である

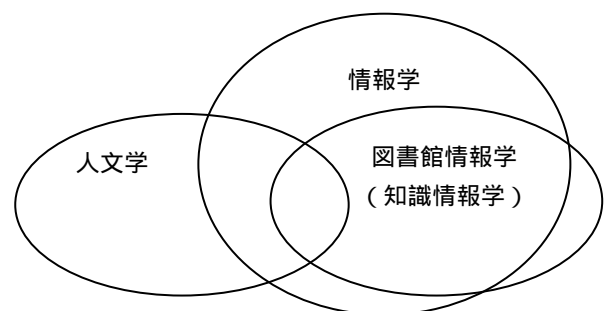


図1 筑波人文情報学研究会の研究領域

Figure 1 Research Area of the Tsukuba Research Group for the Digital Humanities

d <http://www.allc.org/node/196>

e ヴァージニア大学では、IATH (Institute for Advanced Technology in the Humanities, <http://www.iath.virginia.edu/>) 及び Scholars' lab (<http://www.scholarslab.org/>) が中心となって人文情報学の研究と実践が展開されている。

c <http://llc.oxfordjournals.org/>

3. 筑波人文情報学研究会の活動

筑波人文情報学研究会は、2012年度以下のように研究会を開催した。

2012年7月10日(火)

永井正勝

「古代エジプト神官文字のデータベースについて」

矢澤真人

「近代日本語文典コーパスの構築」

「東アジア近代文典コーパス構築」

2012年9月4日(火)

阪口哲男

「多言語 HTML プロジェクト」

「縦書きモンゴル語 Web 環境の構築」

「多言語迷惑メール対策」

宇陀則彦

「デジタルライブラリとデジタルアーカイブの深層構造」

2012年10月31日(水)

池田潤・高橋洋成

「XMLによる楔形文字資料のマークアップ」

大村冬樹

「埴輪の刷毛目による同工品の分析」

2012年11月30日(金)

時井真紀

「妖怪データベース ~画像アノテーションによる知識の表現~」

「地図を用いた知識共有システム」

「拡張現実を用いた情報表現の提案」

鈴木伸崇

「XPath式に対する修正候補発見手法について」

2013年1月31日(木)

松村敦

「情報検索,利用者行動,履歴,Web,絵本と子ども」

「子どもへの絵本推薦に関する研究」

この1年は、お互いの領域を提示しつつ、どのようなコラボレーションが可能かを探るということを想定し、人文側からの発表と図書館情報学側の発表を1回毎に交代で行った。

人文側からの発表では、具体的な研究対象に対するかなり深い議論が展開され、その一方で、その研究対象や研究成果の共有、公開、利活用のためのデータベース化の方法論に対する課題や悩みが報告された。これに対して、図

書館情報学側からは技術的なアイデアの提供や制度設計も含めたシステムの提案があるというのが研究会での大きな流れであった。

また、この研究会では、個々の研究に関する議論に加えて、学生の教育を想定した学際のコラボレーションの可能性や海外のデジタル・ヒューマニティーズに関する動向へも話題が及び、人文情報学における人材育成や国際的な活動へ結びつけようとの気運も高まりつつある。

当初、お互いの立ち位置を把握することが大変であろうと予想された研究グループではあるが、その心配はほとんどなく、すぐにお互いの研究の深いところに共感し、それを尊重する姿勢を維持しながら有用な議論が展開できるようになった。このような雰囲気構築できたことが、初年度の最大の成果ではないかと思う。いろいろなアイデアが沸き上がった研究会であるが、これらをいかにして実のあるものとして育て上げていくかがこれからの課題となるであろう。

4. おわりに

本稿は人文学と図書館情報学および人文情報学の視点について論じるとともに、筑波人文情報学研究会の活動について報告した。本研究会の挑戦、それは人文学と図書館情報学の知見を合わせ「資源共有に基づいて文化の多様性理解を促進し、人文学資料の新しい意味や価値を引き出すこと」である。

今年度は、科研費(基盤研究(C))「アノテーション付与型画像データベースシステムのための汎用プラットフォーム構築」(研究代表者:和氣愛仁)が採択され、幸先のよいスタートをきった。この科研費プロジェクトは、古代エジプト語神官文字の画像データベースシステムを出発点としつつ、他の言語資料や、非言語資料までも一定程度汎用的に扱えるようなデータ構造の設計とユーザインターフェイスの構築を目指すもので、まさに筑波人文情報学研究会の活動の成果として生まれたものである。今後は、メンバーの多様な専門分野を最大限有効に活用しつつ、他大学との連携を深め、日本のデジタル・ヒューマニティーズの活動を活性化していきたい。

参考文献

- 1) 立命館大学グルーパス COE プログラム.
<http://www.arc.ritsume.ac.jp/lib/GCOE/> (2013年7月1日参照)
- 2) 東京大学大学院横断型教育プログラム <http://dh.iii.u-tokyo.ac.jp/>
(2013年7月1日参照)
- 3) アレン・F. レブコ著, 光藤宏行他訳. 『学際研究 プロセスと理論』九州大学出版会, 2013, 485p.
- 4) 石井啓豊. 図書館情報学の再規定による知識情報学の展望. 情報管理. 2011, vol.54, no.7, p.387-399.
<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.387> (2013年7月1日参照)